

内 外 彙 報

比叡山史蹟觀光展覽會 八月一日より同十一日迄、日本橋三越に於て、叡山開創一

千五百五十年を記念して傳教大師奉讃會主催の下に上記の展覽會が催された。

その名の示す如く美術品を中心とするものではなかつたが、尙、叡山を初め天台宗關係の諸寺院より國寶什寶等の繪畫、筆蹟など出陳せられ、夏枯れ時の斯界に一味の清涼劑を投じたものとして喜ばれた。禪林寺藏山越阿彌陀圖、曼殊院藏雪舟筆夏冬山水圖雙幅、同院藏猿猴圖等の著名なる國寶の他、生源寺藏山王靈驗記一卷があつた。之は同時に陳列された蓮華寺の國寶山王靈驗記と繪は恐らく同筆で、一聯の作の何の時から散逸して所藏を異にしたものかと思はれる。神田道伴は鑑定書に於て詞書は青蓮院尊應准后、下冷泉持爲、青蓮院尊傳親王の三筆となしてゐる。その他名品ではないが坂本來迎寺藏國寶阿彌陀二十五菩薩來迎圖、圓乘院藏慈惠大師像等を見るべく、又吉川靈華筆傳教大師像を中心とせる當代八家の聯作大師繪傳八幅も亦記録すべきものであらう。

筆蹟としては、太山寺藏護良親王御令旨、曼殊院藏後奈良天皇宸筆般若心經、延曆寺藏天台宗年分緣起、同、傳教大師將來目錄(越州錄)、慈光寺藏大般若經等の各國寶があつた。(梅津)

土田麥僊の訃 現日本畫壇の一異彩、帝國美術院會員、土田麥僊は、去る六月十日終ひに長逝す。享年五十歳であつた。

麥僊名は金二、明治二十年二月、新潟縣佐渡郡平穩村に出生、十六歳の時(三十年)上洛して鈴木松年に入門したが、翌三十六年暮、竹内栖鳳門に轉じた。

明治卅八年始めて第十回新古美術品展覽會へ「清暑」を出品し、審査の結果

四等に入賞した。是より連年作品を公表し、三十九年には前記新古展第十一回に「殘陽」、翌年第十二回には「春の歌」を出品し、後者は二等の第一席に入賞してゐる。又四十二年の同展第十四回には、「徵稅日」翌年の第十五回には「春山霞壯夫」を出品した。四十二年の文展第二回には「罰」を始めて出品し一躍三等に擧げられて新進作家の名をなした。而して之等の作品には一貫して田園的、懷郷的の情趣が披瀝されて、極めて特色ある作品を生んだ。

明治四十四年には、第五回文展に「髮」を出品し、褒狀を得た。此の年京都繪畫專門學校選科を卒業した。翌年の第六回文展には「島の女」(褒狀)、「冬」、第七回には「海女」、第八回には「散華」(褒狀)、第九回には「大原女」(三等)を出品した。

是等の諸作品は望郷的なものから一步踏み出してゐるとは云へ、しかし其の對象とする所は寫實的なそれのみに限られて居り、大正五年第十回文展の出品畫「三人の舞妓」大正六年第十一回文展の出品畫「春禽趁晴」などとは其の表現様式に於て自ら趣の異なる點を認めなければならない。

大正七年一月には、麥僊は神原紫峰、小野竹橋、村上華岳、野長瀬晚花の四人と共に藝術上の主張によつて國畫創作協會を組織し、竹内栖鳳、中井宗太郎(當時繪事教師)が其の顧問となつた。

此の旗擧げは當時の日本畫壇を少からず驚倒せしめた。それは日本美術院の如き大家連による組織でもなく、又有力なる後援者の背後に在る譯でもなかつた。中年作家としても、寧ろ若い方に屬する之等の作家が堂々と其の主張を明らかにして獨立したのである。

其の宣言の中には「各自は各自の自由の創造を生命とす、然れども今同人が本會を組織して此れを共同の公表機關となす所以のものは何ぞや、異質的の作品は其の創造の源泉たる作家の態度と信念とに翻つて見る時、分明特異侵すべからざるの眞實一路に接せずんばならず、即ち確固たる同人合盟の依據するところなり」云々とも述べた。

第一回の國展は、同年十一月一日より東京の白木屋に開き、後（十一月廿七日ヨリ二週間）京都の岡崎第一勸業館に於て開會した。麥僊は「湯女」を出品した。

國展第二回には「三人の舞妓」、第三回には「春」を出品した。「春」は寧ろ失敗作と評されたが、「三人の舞妓」は一般の注目する所となつた。

翌十年秋には、西歐美術巡禮に旅立ち、十二年三月歸朝した。十三年の國展第四回には「舞妓林泉」を、翌年の第五回には「罌粟」「鮭と鰯」（寫生）「舞妓」（寫生）、「大原女」（寫生）、昭和二年第六回國展には「大原女」、同三年の第七回には、「朝顔」を出品した。

しかし是が國展の最後で國畫創作協會は同年七月二十八日を以て解散、宣言が發せられた。

麥僊の國展時代の作品には作意が漸次理智的に冷徹になつて、技巧的な巧緻が行き渡り、構圖色彩の完美さが際立つて來た點が認められる。而して「湯女」あたりが或ひは前時代との境界に立つ作品であらう。

昭和四年第十回帝展に「罌粟」を出品し、之より再び官展に復歸する事となり、翌五年の第十一回には始めて審査員となり、「明粧」を出品した。七年第十三回には再び審査員となり、翌年第十四回には「平牀」を出品し、翌九年十月廿日帝國美術院會員となつた。而して此の年の帝展には「燕子花」を出品した。昭和十年夏渡鮮し、改組帝展に「妓生の家」を出品すべく七分方は進捗しながら、遂に再び起たなくなつた。（美澄）

富田溪仙の計 帝國美術院會員、日本美術院同人、富田溪仙は、七月六日、忽

如として他界した。享年五十八。

溪仙、名は鎮五郎、別號溪山人、明治十二年十二月、福岡縣博多に生る。幼にして衣笠探谷に就き、狩野派を學ぶこと年あり。弱冠京都に出て、都路華香の門に遊んで四條派を學ぶ。明治卅二年、日本美術協會展覽會に「鷺圖」を出品したが、その畫風は純四條派である。同卅三年、京都美術協會新古美術品展覽會に「隱者」、同卅五年同會に「蒙古襲來」、同卅九年同會に「技藝天」、同四十年同會に「雪」、同四十一年同會に「迦梨帝母」、同四十三年同會に「相思樹の橋」、同四十五年同會に「山海經」「若菜摘」を出品し、なほ卅六年の第五回内國勸業博覽會に「神功皇后釣鮎圖」を出品したが、獨自の新畫風を樹立せんとした彼の態度は却つて時流の解する所とならず、また彼自身の内部に於ても種々の心的苦悶を経験せねばならなかつた。大正元年、第六回文部省美術展覽會に「鵜船」を出品して褒狀を得、同二年、第七回文展に「沈竈容膝」を出品したが、是によつて横山大觀等の認むる所となり、大正三年、日本美術院再興さるるや參加を求められ、同年、同院第一回展覽會に「鼎峙行人」を出品し、これより殆んど連年、其の清新奇拔の畫を以て畫壇を賑した。同四年、第二回院展に「宇治川の巻」、同五年、第三回院展に「沖繩三題」、同六年、第四回院展に「風神雷神」、同七年、第五回院展に「南泉斬猫」「狗子佛性」、同八年、第六回院展に「嵯峨八景」、同九年、第七回院展に「列仙」、同十年、第八回院展に「八瀬の春」「小原の秋」、同十一年、第九回院展に「漁火」「岬」、同十二年、第十回院展に「春日野」、同十四年、第十二回院展に「幻化」、昭和二年、第十四回院展に「大日本六十餘州四季之内」、同三年、第十五回院展に「紙漉」「續大日本六十餘州之内」、同五年、第十七回院展に「雲ヶ畑の鹿」、同六年、第十八回院展に「迅瀬の鵜」「梢の鷺」、同七年、第十九回院展に「優曇鉢羅」、同八年、第二十回院展に「御室の櫻」、同九年、第二十一回院展に「傳書鳩」を出品した。此の間、大正四年、同院同人に推され、昭和五年、同院經營者の列に加つた。昭和十年五月、帝國美術院會員に任ぜられ、同十一年、改組第一回帝國